玉木田独学全集

第五卷

学習研究社

國木田獨歩全集　第五巻（第八回配本）

G六四三〇五

昭和四十一年六月十五日第一刷發行
昭和四十四年八月十日第四刷發行©

定價　千八百圓

著者　國木田獨歩

編集者　國木田獨歩全集編集委員會

發行者　古岡秀人
東京都大田區上池臺四ノ四〇ノ五

印刷者　矢島貞雄
長野市西和田四七〇

發行所　株式會社　学習研究社
東京都大田區上池臺四ノ四〇ノ五
電話（七二〇）一一一一
振替東京一四二九三〇

愛弟通信　日記　書簡

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目

次

愛弟通信

海軍從軍記……一
波　濤……一五
大連灣進擊……三八
艦上の天長節……四七
大連灣占領後の海事通信……五四
威海衞偵察及其近傍……六〇
海上雜信……六三
艦上に空しく腕を撫す……六五
艦隊の旅順攻擊……六八
旅順陷落後の我艦隊……七四
大連灣掩留の我艦隊……八二

艦中の閑日月……八四
艦上近事……八八
大連灣雜信……九〇
海上の忘年會……九六
千代田艦の偵察……一〇〇
威海衞大攻擊……一〇三
威海衞艦隊攻擊詳報……一一〇
敵艦降伏……一一八
威海衞大攻擊　北洋艦隊全滅！……一一〇
分捕軍艦の回航……一一八
最幸にして最戰功ある千代田艦……一一〇
敵艦廣丙號捕獲詳報……一一二
年少士官……一一四

水雷砲艦龍田號……一五六

日記

明治廿四年日記……一六一
鎌倉日記……二一四
前額記……二三三

書簡

明治二十三年……二三九
明治二十四年……二三六

明治二十五年……二四六
明治二十六年……二五七
明治二十七年……三三二
明治二十八年……三六六
明治二十九年……四〇七
明治三十年……四一四
明治三十一年……四三三
明治三十二年……四三五
明治三十三年……四三九
明治三十四年……四四四
明治三十五年……四四九
明治三十六年……四七四
明治三十七年……四七八
明治三十八年……四八二

明治三十九年……四九四
明治四十年……五〇七
明治四十一年……五四八
書簡補遺……五五九
愛弟通信解題……福田清人……五九三
日記・書簡解題……塩田良平……六一八
發信關係記事抄……六六五
年次書簡一覽表……六八六
宛名別書簡一覽表……六九五
主なるヴァリアント……七〇〇

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

愛弟通信

海軍從軍記

西京丸の船房に於て

十五サンチ敵彈の破丸一片を文砧となして、西京丸の船房に此文を草す。

三十六灘の潮路、今已に其半を過ぎぬ。指してゆく先何處ぞや。知らず。知らずと雖も問ひもせず。微笑一番、竊にうなづくところあれば也。いざいざ、心靜かに昨夜よりの事、一つ二つを筆にまかして誌し、己が海事通信の端をこゝに開かんとす。

○廣島の客舍より宇品港まで、吾を送りたるは。久保田金僊君のみなりき。君よ有難し、こゝより去り給へと言へど聽かず、終に共に端舟を僦ふ。少年二人吾等のために櫓を操つる。夜已に十時、天曇りて月暗し。空の星おちて海上に散じ、港內無數の舷燈となる。黑き怪物かしこ、こゝに橫はるは皆な御用船なり。西京丸何處にある。尤も遠き一點の光、明滅してかすかなり。彼れなりと少年いふ。遠ふしゝゝと他の少年つぶやく。默して相對するは吾と久保田氏。そよぐ潮風、立つや小波、相顧みて笑ふ。陸と海、共に從軍す、君と吾、再び相遇ふは何れの時ぞ。

端舟西京丸に近づきたる時、滿艦寂たり。忽ち艦上に聲あり。『何者ぞ』

吾聲を高め甲板を仰ひで答ふ。

『艦隊の從軍を許されたる新聞記者なり。大本營の指命を得て今夜貴船に乗り込まんとす』

艦上の者再び、強くして明晰なる聲を以て答ふ『右舷の船梯下し難し、左舷に回ぐれ』

左舷の梯下にいたれば已に一艘の端舟ありて、其處に繫ぎ、二人の男荷物を運び居たり。

吾も亦た少年をして行李を艦上に運ばしめて甲板に上りぬ。番兵銃を提げて直立せり。他に二三の水兵あり。又た一人の紳士ありて番兵の側に立つ事情互に通ぜず、互に顏をすかし見て多く語らず。吾、艦長に呈すべき紹介狀を水夫に渡して、艦長に通せしめ、指揮を待つ。此時の光景極めて異狀。曇りたる大空、朧ろなる月光は、更らに慘たる趣きを添へたり。

金僊氏梯を上り來りて、然らば吾、去らんといふ、互に言葉少なに別れを告ぐ。氏の舟未だ艦を去る幾何もなしと思ふ頃、一滴二滴、落つるは雨なりき。

彈片文砧の文字は以上のものにて盡く。今は吾已に玄海灘の浪荒らき處にありて、寢室の燈下に筆をとる。窓外の浪聲なか〳〵にすさまじく、船左右に動搖す。

すかし見れば月の光は水の如く、小山なす波上に落ち來りて茫たる氷原の如し。

○一人の紳士は時事新報の特派員なりき。吾等兩人に一室を與へらる。但し中等室なり。

○同船者には某大佐、少佐等あり。船首に馬五頭繫がれたり。

○士官吾等のために、曩の海戰の際被りたる損所を一々細かに說明し聞かせ、船尾船首の大砲について、種々發砲の手續など說きぬ。

○燈をかゝげて船底の一室に入る。室暗く光微に、燈をかゝぐる者の顏面赤く輝きて其の他は吾も人も暗影につゝまる。彼の人先づ進みて右舷につき指して曰く、これを見よと。たゞ見る艦體を包む鐵板、うちに膨くれて其の尖頭ザクロの如くさけたるを。これ水線以下にあるものなり。彼の人曰く此創小と雖も其性質や尤も恐る可きもの、敵彈右舷を隔つる數間の海面に破裂し、其の一片飛んで玆に達したるなり。

○昨夜、夜ふけて滿艦の人眠りたりと思ぼしき頃甲板の上に、二三の水兵と語る。海戰當時の光景は彼等が訥朴なる言語によりて其の一般を想像し得たり『敵彈グン〳〵と頭上を飛びゆく』と一水兵手を擧げていひぬ。上甲板に上ぼるべき梯の半に腰かけたる水夫ひそめたる聲を強くして曰く『敵艦もなか〳〵に勢はげしく戰ひぬ。其てぎわ見るべき者あり、必ずしも侮るべからず』と。此時宇品港は寂として聲なく、細雨ぱら〳〵吾等の面を掠めて來る。

艦上の勸工場（第一信追加）

十七日西京丸にて

○何等の奇異なる光景ぞ

士官吾を顧みて曰く『見られよ勸工場を』

砲座の下、マストの傍、陳列の品は何々。十五歲計の少年の前に列べたるは狀袋、楊枝、手帳、ボタン、鉛筆、書翰紙、其の傍に柿の一籠。少年の横に五十歲計りの男、シヤツ、ズボン下、などひさぐ。彼れに對し三十歲計りの景氣よき男又た少年と同じ樣なる品を賣る。四十計の婦人あり、柿と栗とを列べた

り。

花主の御客様は誰れぞ。白ろき衣鼠色と化けたるは水夫。砲座に立たるは某々の陸軍將校。立つものあり、腰かくるものあり、他の肩にもたるゝものあり。笑ふもの、どなるもの、ひやかすもの、錢を懐中より取出すもの、品物をひねくるもの頗ぶるまち〳〵なり。

『これはいくら』『百枚で二十五錢』

『ブル〳〵〳〵〳〵。馬鹿を言ふな』

『をい〳〵まけろ。貴様達も大に盡すべきは今ぞ』『四十錢？』

『イヤ七十錢で御座ります』

『何だ七十錢？　ボー歸れ〳〵！』『これはいくらだ、十錢？　八錢にせへ！　八錢に！　ならん？　ふん！　ヨシ〳〵十錢きばる、そのかわり此の手紙をポストに』

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com